



発行所
原社

〒606 京都市左京区
東竹屋町・川端東入る
部落問題研究所内
電話 京都 761-2141 番
振替口座京都 15762 番

発行人
木村京太郎

価額 1部 200円
年 2,000円(元共)

去る五月二六日東京で、平和・民主主義・革新統一をすすめる全国懇話会（通称「革新全国懇」）の創立総会が開かれた。この一年で全国四七都道府県のすべてに、同趣旨の懇話（談）会が結成され、その中央連絡調整機関として革新全国懇が生れたのである。

られない
や政治・社会・文
機的な情勢が明ら
このままでは戦
かも今度は生き残
”もう黙つてはい
共通の決意となつ

の全面にわたる危
にされた。

はこの歓迎集会を開こうと計画している。社・共や総評その他の民主団体は「ミッドウェーは帰港をやめよ」、「非核三原則の法制化」「諸悪の根源安保条約を廃棄せよ」の合言葉で、全国的な国民運動をしようとしている。私は今までこそ、玄島の原爆弾に大書きされ

七艦隊の旗 ミッドウェーが母港と称する横須賀に帰つてくる。横須賀市長や神奈川県知事などから、帰港延期の要請が政府に出されているが、自民党はこの歓迎集会を開こうと計画している。社・共や総評その他の民主団体は「ミッドウェーは帰港をやめよ」、「非核三原則の法制化」「諸悪の根源安保条約を廃棄せよ」の合言葉で、全国的な国民運動をしようとしている。私は今までこそ、玄島の原爆弾の大書きされ

京都でも昨年五月、「日本の平和と民主主義をめざす京都懇談会」(京都平民懇)が生れ、平和フォーラムや、食糧、農業問題を語る集い、地域交流懇親会、などの巾広い活動が行われた。この革新全国懇の創立総会では、代表世話人の一人大阪の亀田得治氏(元社会党代議士)が経過報告で、「全国懇賛同者が各界の知名人一万二千名、二五〇団体三九〇万に達し、革新運動史上画期的なものになったこと、その急速な発展の最大の理由は、党派や専門を問わらず、心ある人々が現在の米日反動の露骨極まる軍国主義推進にもう黙つていられないとして立ち上ったことにある。と強調し、満場の拍手をあ

私たちとはこれまで、安保条約に基づく日本を守る義務、という言葉をよく聞かされた。しかし「日本を核のカサで覆う権利」などとは始めて聞く言葉である。しかも、これがアメリカの現国防長官の発言だから事は重大である。こうなると、日本及びその周辺の安全保障という安保条約の建前はふたとび日本はアメリカの核世界戦略の一環となる。演習中の原潜が、日本船を沈め乗組員を殺そうと、はえなわをズタズタにして漁民の生活をつぶそうと、アメリカの関心事は専ら原潜の所在をかくす世界戦略にある。もちろんこれはアメリカの考え方で、日本は憲法を守り、自主性を貫けばよい話である。し

これは「銀河鉄道九九九」「竜の子太郎」など、子供たちに夢とロマンを与えて親しまれてきた東映動画がいま新しくつくりうとしている戦争もののアニメ映画である。その内容は、米ソの戦から始まり、日本、中東、中国がひきこまれて、第三次世界大戦となり、核戦争になる。最後は日本青年が特攻精神で核ミサイルに体当りして、滅亡直前の人類を救う、というものである。日露戦争美化の映画「二〇三高地」が成功を収めたので、東映では引つづき映画「大日本帝国」の製作を企画した。

また、米軍基地の中にある沖縄、岩国を抱える山口、演習中の米原潜にはえなわ漁業をじゅうりんされた青森、北海道の代表などから、核武器を積んだ米原潜の盲動ぶりと、日本政府の無策と従属性が告発され、満場の怒りをかきたてた。

しかし残念ながら日本政府もまた、国民のいのちやくらよりも、アメリカとの同盟関係を優先させる。かくては日本は一歩づつアメリカの核戦略体制にひきこまれてゆく。

いま、ライシャワー や、現国防長官が公然と認めている核載艦の日本寄港が、憲法や「持ちこませず」の非核三原則じゅうりんである、と国会での大論議になつてゐる。そのさ中に米第

さらに今度は、近頃はやりのアニメ手法で、戦争を知らない子供たちを粗おうというのである。地名や軍隊は全部実名、ソ連の落下傘部隊が国会に降下、新宿御苑占領、ソ連のロケットで新幹線が吹きとぶ、という生々しさである。君が代の復活、元号の法制化、靖国神社の復権、と続いた軍国思潮を巧みにしのびこませている。私たちはもう黙ってはおられない。(Y)

故品角一郎さんの

思い出を語る

語る会の第一六回定例研究会は、五月十六日午後二時から四時半まで、京都市職員会館「かもがわ」でもたされました。当日はまたま他の会場で「京都労働運動OBの会」が開かれたのでそちらへ行かれたのか、出席者十四名ちよつと淋しかった。が今日の会場は二階だったので、窓外に見える濃緑色の東山の陵線が部屋の感じを落としたいた。

品角一郎氏を偲ぶ会

定刻、司会者山田幸次さんから「故品角一郎氏の紹介のあと、ゲスト北牧孝三氏から偲ぶ話があり、出席者からも思い出が語られ、さいごに品角さんの愛弟子石田昭子さんから品角さんの「きびしい態度と芸術観」について話された。(文責 井上秀雄)

あいさつ

山田幸次氏

本日は先日亡くなられた品角一郎さんとの思い出を皆さんと共に語り合いました。彼については私なりの印象を申上げると、彼は非常に身体が弱かった。それにもかかわらず、身体を張って実際に多面的な活動をしてこられた。日本の敗戦直後から日本全

のため、とくに農民運動の組織づくり併せて民主的な文化活動、又河田賢治さんの選舉參謀としての活動など、実際に多忙な中で、多くの立派な芸術作品を描きとおしてこられた。まことに強い信念の人という印象をうけています。彼については私なりの印象を申上げると、彼は非常に身体が弱かった。それにもかかわらず、身体を張って実際に多面的な活動をしてこられた。日本の敗戦直後から日本全

件降伏し、同年十月六日「治安維持法」一九四五年八月十五日に日本は無条件と共に特高警察が廃止され、十月十日政治犯三千名の釈放など、日本全

品角君の人間像

北牧孝三氏

国にわたつて目まぐるしい変化が続く中で、十月二十一日京都の新聞会館で徳田球一を迎えての解放運動ギセイ者出獄歓迎大会が開かれた。この日を一日千秋の想いで待つていた各地の民主的活動家が、新聞会館を超満員にした。

(一) 最初の出会い

その中に私も品角君もいたが、お互に顔は知らなかつた。

その後日本共産党は全国的に党的再建をすすめ、京都でも小松雄一郎氏を書記長として党の再建が行われた。

翌一九四六年半ば過ぎた頃、中央本部から春日正一氏が京都へ来て、新しく組織について直接指導されたが、そ

の時に私は労働組合を担当、品角君は農民組織担当の任務が与えられた時に顔を合わせたのが、私と彼との出会いの最初でしょう。そして私と品角君はおたがいに戦争で荒廃した農村や農民

の生きる権利を守る斗いや、都市の労働者、勤労市民の生活防衛の斗いの先頭にたつて斗う事になりました。同志として話しあつたのもこの時が初めてです。又品角君自身も新しい民主主義への人民的な斗いの経験はこの時から始つたものだと思います。

私が京都へ戻つて彼に会つた時、彼は農民運動の常任を止めて、画をかき詩をかく、一かどの文芸作家として成長していました。私が市会議員となつた後も私と彼の交友は環境をこえて深まつてゆき、芸術的にも政治的にも急速な成長を遂げた彼は私にとって全く敬愛する同志であります。

又二人の間にはおたがいに党员として人間として民主的諸活動と共に斗い、共に耐えてきて、それを誇りとする党的・思想的にも統一された何ものかがありました。だから会えばおたがいに安心感が先にたつ、それが彼と私は深く親しくなつたのです。

いま

(二) 交友のはじまり

当時の日本農民組合の事務所は、京

都市内の新町通七条を南入、元木旅館の一隅にありました。(小柳津氏の発言の中から)品角君が春日氏の指導に従つて「日本農民組合」の書記局入りを

したその日から、体力と足を最大の武器としなければならない本当に地道な農民の組織づくりに飛び込んで行きました。農民の事は何ひとつ知らないわゆる「素人」であったと言つていましたが、泉隆さん、丹後の間人(いたゞ)の奥田茂夫さん等、よき指導者を得て、この地道な斗いに終始する農民組合に自信をもつたのでしよう。彼は着

した。農民の事は何ひとつ知らないわゆる「素人」であったと言つていましたが、泉隆さん、丹後の間人(いたゞ)の奥田茂夫さん等、よき指導者を得て、この地道な斗いに終始する農民組合に自信をもつたのでしよう。彼は着

(三) 彼の生涯と思想

人間品角を語ることは、彼の生活を知っているものには容易のようですが、又、なかなか困難なこともあります。幸い彼には、自著『岩に憑かれた男』を残されたので、それが彼を支えた深いきづなでもありました。

特に農村青年は彼の高い文化

的教養と熱情にみせられたように立ち上り、丹波、丹後一円に組織は拡大され、彼は京都にいる時はほとんどない程多忙な日々に追いまくられました。

(この当時、私も彼と一緒に「赤旗拡大」の為農村を歩る、大きな援助を受けた思い出があります。(筆者井上))

私は品角君が農民の間へ飛び込んで行つてから間もなく、関西地方委員会の組織部員として大阪に常住することになり、自然彼とは疎遠になり、約7年間、おたがいに多忙な日々を送つていました。

私が京都へ戻つて彼に会つた時、彼は農民運動の常任を止めて、画をかき詩をかく、一かどの文芸作家として成長していました。私が市会議員となつた後も私と彼の交友は環境をこえて深まつてゆき、芸術的にも政治的にも急速な成長を遂げた彼は私にとって全く敬愛する同志であります。

又二人の間にはおたがいに党员として人間として民主的諸活動と共に斗い、共に耐えてきて、それを誇りとする党的・思想的にも統一された何ものかがありました。だから会えばおたがいに安心感が先にたつ、それが彼と私は深く親しくなつたのです。

いま

としての彼の思い出をまとめることにしました。

彼のおいたちは私達貧農の家庭に生まれた者と同じような生活、生きるために人一倍の困苦を背負つてきました。戦争によつて家庭の生計は女手にまかされ、唯一の働き手は母ひとり、生活苦は大変でした。腹半分の飯も食えない毎日で、少年としては本当に悲しい日々であつたと思います。きびしい生活苦の中で育つた彼はいつの間にか『人間の生きることは何のためか』と人間の生かされ方に、疑問を持つようになつたようです。少し早熟のようですが自分を取りまく社会の有ざまを見ると理屈なしにそのような考え方を持つのも当然のなりゆきとも言えましょう。しかし彼には只一つ救いがありました。彼は絵を画くということに打こめる天才的な素質がありました。彼があらゆる生活上の困難にも耐えぬき、社会的矛盾とも妥協せずに斗い、むしろいろいろな矛盾と斗う中でこそ彼の立派な芸術が完成していくといえましょう。



ありし日の品角一郎氏

す。きびしい生活苦の中で育った彼は、いつの間にか『人間の生きることは何かのためか』と人間の生かされ方に、疑問を持つようになつたようです。少し早熟のようですが自分を取りまく社会の有様を見ると理屈なしにそのような考えを持つのも当然のなりゆきとともに言えましょう。しかし彼には只一つ救いがありました。彼は絵を画くといふことに打こめる天才的な素質がありました。彼があらゆる生活上の困難にも耐えぬき、社会的矛盾とも妥協せずに、斗い、むしろいろいろな矛盾と斗う中でこそ彼の立派な芸術が完成していくといえましょう。

運動に参加し多くの仲間と共に斗いの道を進みますが、とりわけあの野蛮な戦時体制下の特高警察の追求と斗い乍ら自己の仕事を守り又、その中で彼の社会観、世界観を確立してゆきます。そしてそれが戦後、日本共産党が再建されると同時に入党し自らを党と人民に捧げるよう決意を固めさせた大きな原動力であったと思われます。

入党してから

品角君の党活動は非常に多面的であり、简单には言いつくせません。私はこれでは彼と最も関係の深い農民運動に焦点を当てて彼の活動の一端をのべたいと思います。

彼が農民運動に参加したのは、はじめに申しましたように春日正一氏の指導にもとづくものでした。彼はこの指導に応えて積極的に献身的に参加し、長い戦争によって破壊された農民の生活を守り、農村の生活を守り、農村の改善の斗争の先頭に立ちました。当時の農村の現状、とくに丹波、丹

入党してから

品角君の党活動は非常に多面的であり、简单には言いつくせません。私はここでは彼と最も関係の深い農民運動に焦点をあてて彼の活動の一端を述べたいと思います。

彼が農民運動に参加したのは、はじめに申しましたように春日正一氏の指導にもとづくものでした。彼はこの指導に応えて積極的に献身的に参加し、長い戦争によって破壊された農民の生活を守り、農村の生活を守り、農村の改善の斗いの先頭に立ちました。

当時の農村の現状、とくに丹波、丹

動に参加し多くの仲間と共に斗いの道を進みますが、とりわけあの野蛮な戦時体制下の特高警察の追求と斗い乍ら自己の仕事を守り又、その中で彼の社会観、世界観を確立してゆきます。そしてそれが戦後、日本共産党が再建されると同時に入党し自らを党と人民に捧げるよう決意を固めさせた大きな原動力であったと思われます。

彼の藝術について

私は彼の芸術家としての業績を正しく語るほど専門的な知識をもちません。彼の作家活動については、彼の愛弟子の石田さんに譲ることにしたいと思いますが、若干私の感想を述べさせてもらいます。

彼は芸術創造を通じて人間的にも大きく成長した人でした。又党活動を通して、自然と人間との本質を学び、それを創造活動に生かした人でもあります。

彼にとっては自然はすべてであり、ここに生きる人間の生きる努力がすべてでした。彼の芸術・作家活動はそのことをよく示しています。そのことが、彼の芸術的表現のなかに表われていると思います。

後地方の農民は國の土地收奪と農民へ
の搾取によつて、生活は破壊され、農
業に自信を失つた青年が多いなかで、
彼は日農京都府連の書記として、農民
組合を組織して働く農民に日常斗争を
通じて、團結することを教え、生きる
道すじを 資本主義社会における農民
のおかれている位置、矛盾と、それか
らの解放の道を指ししめしました。そ
して農民とともに、國のどん慾な搾取
と收奪に怒りをもつて斗い、指導した
のです。私は本当に農民とひとつにな
つて農民の幸福のためにがんばった彼
の生き方に尊けいの念を惜しみません

しかし彼の作家としての、芸術家としての生涯は、彼のいくつのかの作品の中に残っています。同様に又、彼の政治活動においても、京都の芸術家として、民主主義を守り、発展させる諸活動の中に、運動家であった彼の果した役割の偉大さは決して忘れられることはないでしょう。

彼の生涯は、自らの政治思想と芸術活動とが一体となった斗いの中についたと思います。それは自然と人間性の偉大な統一と実践であったと思います。本当に友人として、同志として彼は実践のなかからいろいろと私に学ばしてくれました。今、私は心から尊敬の念をもって彼に『ありがとうございます』といいたい。

したとき、科学的社会主义の道がひらく
かれる……。
まさに、彼は芸術家党員としてその
道をつかんだひとりであつたと私は思
います。しかしその創造力を彼の健康
が阻んだことは残念でたまりません。
彼は芸術観のうえでも円熟の期にあつ
たと思ひます。

自然を愛し、人間を愛する彼はその道を邁進しました。この創造力はどこから生れたものでしようか。彼の『岩に憑かれた男』はその心をうたつていて、それは彼が長い人生経験を通じて、作家活動を通じて、社会の矛盾と斗う中で生れたことを知らしめています。斗いの中で、自然と人間の本質を知りその精神に徹したことにあることを示しております。

品角先生から 学んだこと

石田昭子

一九六四年六月、京都民主主義美術協会結成のための話し合いで訪れた時が、はじめての出あいでした。子ども頃に二条公園へよく遊びに行つて、夕暮れになるまで家に帰らず母親にいつもぶたれて泣いていたのを想い出していました。学区外で家からは三〇分以上は歩かなければならぬ程、遠かつたので、母親の心配は当然だったのでしょうか。二条公園の近くの家というのが、ずいぶん、懐しい気持ちにさせていました。人間が直面するいろいろな瞬間を創造に結びつけた、きびしい生活態度で、毎日をおられた先生は、独特的芸術論の中でも、「人間の運命は生と死の一瞬の中に生きている自己を宣言することが、芸術の本質である」といきなり、いのちを表現することを真髓とした、常に生死をかけたたかいの生涯であったと思ひます。

二〇代の頃の作品、「ますの図」を描かれた時の話を想い出します。「肺病の時に、お母さんが鰐を買ってきて、料理される時に、あの灰色の下に真赤な身が現われ、鰐がかわいそうになり、ドストエフスキイの『悪魔』の主人公と自分の肺病の顔と鰐の顔が浮んできて、生への執着みたいなものを『鰐』の中に描きたかった」ということでし
た。「高橋申一の『鰐の図』は自然主

義的だけど、自分の作品はいのちを描いている」と言わせてました。

人間のいのちが具体的に表現されている古典の作品から学ぶこと、ミケランジェロが、ベートーヴェンが自然とどう対処していたかを、單に美しいといふところから出て、そこにいのちがあるから美しいということを教えられました。

また、現代社会の多様化の名の下に、表現方法も形式化され、説得力のない作品の多いのを嘆き、ミケランジェロ、セザンヌ、ロダン、ピカソが生れても、なおかつ、彫刻家が、画家が努力するのは、それは過去の偉大な作家ないものを創造したいから、自分を表現したいからであること。そのためには、描くことを絶対にやめ、作品の中に自分がすべてを出しつくす努力をすることが必要性を学びました。

既成画壇に属さず、どの流派とも関係なく、生涯、一匹おおかみで自己の芸術を追求、確立し、常に美とのたたきの必要性を学びました。

既成画壇に属さず、どの流派とも関係なく、生涯、一匹おおかみで自己の芸術を追求、確立し、常に美とのたたきの必要性を学びました。

研究例会（予告）

第一六回研究例会を左記の通りひらきます。くり合せゼビゴ出席下さい。

記

とき 六月二二日午後一時半より
ところ 中京区竹屋町通河原町東入
京都府職員会館「かもがわ」
テーマ 戦前戦後の京都の文化運動
ゲスト 戦前・戦後の活動家、現部落
落問題研究所長 藤谷俊雄氏
参加費 一名三〇〇円（茶葉代を含む）

京都の民主運動を語る会

かいの中で到達された品角芸術の真価がとわれるのは、むしろ、今后にかかると思っています。

去年と一昨年、三回にわたる四国行ときは、京都から一步も出られたことのない先生にとっては、四国の自然と接した若い人たちから学ぶことが多く、創作意欲をかきたてるものでした。帰つてからは、先生の体を心配して訪問して下さる方に、弘法大師と満濃池の偉大さを説き、今年のお正月には、二〇点程の作品を描かれました。

先生から学んだ真の芸術を追求していくことを誓い、安らかにお眠り下さい。

先生から学んだ真の芸術を追求していくことを誓い、安らかにお眠り下さい。

詩と画のなかの 品角さん

加納 たけし

品角さんの詩と画についていくらか語りたいと思う。もとよりぼくはその任に足りぬのだが、これについてどうしても言わねばならぬことだけは人に互してあるだろう。いずれ「窪田徹論」を書くことはまだ果されぬ故人との約束であった。窪田徹とは詩人としての品角さんの名である。

とりえずその一端を書きつけさせてしまい。最期の品角一郎のある部分である。

三年ほど前だったか、いつものよう夜に深い仕事場でむかいあつたとき、一つの紙片を示された。

花はきれいだ
そこにはいのちが咲いているから

私は花が好きだ

言葉通り意味をたどつてもここから

何もたちあらわれない。「花は紅、柳は緑」といった神語を想いうかべるのが精一杯だろう。だが、それにしても

刻むように記された鉛筆の文字が示すのは別のことである。

花が咲くという、たつたそれだけのことへの童児のような嘆激がここにある。しかも作者の全生命がそこにこめられている。抒情をほとんどぞけたところで、理解を絶する感動の軌跡にぼくらは立ちあつてゐるのだ。言葉の上でこんなに単純なことになぜこれほどうちこめるのか。

考えてみれば品角さんの詩にはいつもそういうところがあつた。どこまでも拙なのである。近年になるほどその形は児童詩に似てもきていた。

ごく少数の本当の詩人と壇倒的な数の庶民とだけがこの世界を理解し、感動と共にすることができるだろう。活字を通すとどこかよそよそしくなつてなかなか見えてくる世界もある。

品角一郎は、言葉によつてではなく、その生きる姿においてこそ詩人であつたのだ。

品角さんの所を訪ねるといつも帰りは翌日になった。そういう最後の記憶は桜の頃だけれども寒い夜であった。一時は起きだして仕事をされていたこともあつたのだが、この時はまたベッドに寝つきの姿であった。

範寛の「溪山行旅圖」の写真を前にして、一幅の画が宇宙と人間とのことごとにせまりうる可能性について論

は及んだ。季候が定まつたら今一度四国に渡つて剣山に登るのだ、と話された。中國のすぐれた古典画家たちと真正面から向きあつて日本の山水を成してみたいと期されていたのだろうか。その時、どういう筋道であったか、話が鉄斎のことになつて、ぼくが言った。

「……鉄斎はやっぱり八十を過ぎてからですね。しかも最晩年ほど力があつて、信じらんところがありますね。」

一瞬、品角さんの眼が氷つた。そうしてやがてひとりからなる笑みを口元に宿された。

「そいつを乗りこえんとね。」

自分の生命の跡をこのとき品角さんはどう観じておられたのだったか。近年の四国行を機にまた画が大きく変わり、大雅堂、浦上玉堂にせまり、まさに鉄斎に互すべき山水世界の峰がはるかに築かれようとしていたのだつたが。

品角さんの絵画について一言で述べるには、今、やはりとてもぼくの任ではない。ただぼう大な作品はぼくの前に残されており、いつかこれをよじ登つてみたいと氣をそそる巨大峰が雲間からかいま見えるだけである。しかも、この山の存在を知る人すらまだ多くない。

△懇談会のなかから△

品角さんの芸術

小柳津恒

品角さんの農民運動は、新町七条の元木さんの家に日農の事務所があつた頃ですが、品角さんが泉隆さんと一緒に事務をとつたり、出かけたりしてのを見掛けます。それから泉さんの後を品角さんが引受けるようになつたのでしよう。尚それまでに品角が鐵斎のことになつて、ぼくが言った。

「……鉄斎はやっぱり八十を過ぎてからですね。しかも最晩年ほど力があつて、信じらんところがありますね。」

品角さんの絵画について一言で述べるには、今、やはりとてもぼくの任ではない。ただぼう大な作品はぼくの前に残されており、いつかこれをよじ登つてみたいと氣をそそる巨大峰が雲間からかいま見えるだけである。しかも、この山の存在を知る人すらまだ多くない。

品角さんの絵画について一言で述べるには、今、やはりとてもぼくの任ではない。ただぼう大な作品はぼくの前に残されており、いつかこれをよじ登つてみたいと氣をそそる巨大峰が雲間からかいま見えるだけである。しかも、この山の存在を知る人すらまだ多くない。

△懇談会のなかから△

品角さんの芸術

小柳津恒

愚 談 会 の 世 話 役

糸 井

一

文化人交流会の前身はいつかの鰐川選挙の時に、愚談会として組織されたもので、品角さんが事務局を担当し一切の世話をしてもらつていた。私が最初参加した場所は円町にあつた診療所の二階でした。当時、愚談会という看板とハッピがありまして、会場はメンバーの家が廻りもちという事にして、会場になつた家の主人がそのハッピを着て、サービスをする看板は席に掛けている事になつっていました。まあ、最初の間はあまり政治の話もせず、大いに歌い、酔うという会でしたが、だ

昭和二二年ごろ、青服劇場というのが書かれていた。五年程前でしたか、文化人交流会の席上、彼の画を見ました。変った画で紙一ぱいに墨で東山が書かれていた。何だか真黒で、びっくりしました。五年程前でしたか、文化人交流会の席上、彼の画を見ました。写真ですが今度は違つた意味で、びっくりしました。岩が画いてあったのですが、実際に安定感がある。びっしり決つていて。画を通して彼の藝術の成長を、その深さを感じさせられました。

△青服劇場のころ

西 村 清 之

昭和二二年ごろ、青服劇場というのが作られた。吉田義雄さんがチューータで、劇団員は島津私等公団、目立劇場からつられた青年等で、當時党の文化活動の一つかつであつた。翌二三年の夏休みを利用して約一週間、丹後の方をまわる事になつた。橋立に党的療見たいなものがあつて夜はそこで宿り、星はストをやつている労働組合へ行つて芝居をする。

そんなある日、宮津の乗船場ではじめて品角さんに会つた。白い小さなハンチングをかむり、やあーと片手を挙げて「ご苦労さん」と、大きな声だつた、「よう品角!!」と吉田さんが駆け寄つて、がつしりと握手をしていた。そして一緒に汽船に乗つた記憶がある。

文 工 隊 と 品 角

河 田 賢 治

昭和二三年夏、党の組織の弱い丹後方面へ文化工作隊（文工隊）を入れようと考えた。私は当時、福知山の国鉄を中心としたレッドバージ組の若い連中のなかつたので、品角君が調べてくれ

事になつた。党的パンフレットを持つて売りつ宿も決めずに入るてゆくのだ、まず大江町で、学校を借る、子供があーと集つて来ると紙芝居をやる、京芸の谷君なんかが歌をうたう、田舎の山奥の事で、ラジオも充分になにかを討議していられたのを記憶しています。四七年ごろ延寿寺で党に関係する画家の集団が出来ました。五、六人だつたと思います。その時であつたか? 大きな疊四疊敷程の画を貰いました。変った画で紙一ぱいに墨で東山が書かれていた。何だか真黒で、びっしり決つていて。画を通して彼の藝術の成長を、その深さを感じさせられました。

△青服劇場のころ

西 村 清 之

昭和二二年ごろ、青服劇場というのが作られた。吉田義雄さんがチューータで、劇団員は島津私等公団、目立劇場からつられた青年等で、當時党の文化活動の一つかつであつた。翌二三年の夏休みを利用して約一週間、丹後の方をまわる事になつた。橋立に党的療見たいものがあつて夜はそこで宿り、星はストをやつている労働組合へ行つて芝居をする。

そんなある日、宮津の乗船場ではじめて品角さんに会つた。白い小さなハンチングをかむり、やあーと片手を挙げて「ご苦労さん」と、大きな声だつた、「よう品角!!」と吉田さんが駆け寄つて、がつしりと握手をしていた。そして一緒に汽船に乗つた記憶がある。

△文工隊と品角

河 田 賢 治

丹後方面は随分歩いたものです。宮津では小学校の女の先生で三木という人に非常に世話をかけた。その人は、現在京都で結婚して全日自労の事務局におられる（現在名志倉）

（次頁四段目へつづく）

△ 隨 想 ▽

『聴き書き屋』

井垣 次光

私は昨年三月以来、「燎原」紙上でゲストの談話をもう十五、六まとめて来、この仕事も大分板についてきたようだ。この仕事は大学の教室で教師の講義をノートに書きとるのとちがつて一寸、骨の折れる点もあります。

年輩のゲストの半世紀も前の思い出になれば、誰しも記憶も薄れようし、労働者、農民のゲストの話になれば、話下手の人もあり、時代背景や記事などデータも加えたり、表現法や記事の小見出しにも十分気をつかわねばならぬ。

私は記事を後世に残る権威あるものにしたい念願から、不正確な名前、その他のも徹底的に正すようしている。物故者はできるだけ、名前を掘り起しこうようにつとめている。これは供養にもなることだから。この仕事は無報酬で、気の向くままで暇を見て、楽しみながら、道楽にやっている仕事だけに、気の向かないゲストには勿論おことわりすることになります。

私と長い間のおつき合いで、議会連記者のF女史に、この業界の話をきいてみると、テープレコーダー、正式速記録、翻訳、ゲストのチェック、談話の内容が専門的知識を要するものは勿論事前に、研究、勉強、調査などに

相当の時間をとるものもあり、また、一時間の翻訳時間は、平均スピードで約十五時間、関東・関西で、各同業者の協定価格もあり、開相場もあり、詳しい事情を教えてくれました。それは相当の商品価格だが、ここでは省きます。

私たちのちがうところは、テープ、メモ速記、過去の豊富な闘争歴、といわば一種のやっつけ主義で、その上本職とちがい、時代背景や、小見出しがつけ、できるだけ読み易いように、社会サービスをする点でしょう。

今日まで、幸い、好ましくないゲストにも出合わず、皆さんによい記念になると心から感謝され、生来お人好しの私は気をよくしている次第です。

ゲストのチェックにゆくと、忠実な書きかえる人、二三日置いといてくれと、慎重居士の方もおられ、これらで、ゲストのかくれた性格もわかり、なかなか面白い面もあります。

今、私が京都の戦前で、まとめて、記録にとつておきたい個所が三個あります。

第一は——関西中心に、昭和六年、八・二六事件で大検挙が行われた。京都では四・一六事件で泉隆氏など起訴され、その後、飯田助左エ門氏たちの下からの全協活動、党大阪市委員会の

当委員長小西政雄氏などの京都への再建の指導がのびていたが、中央からこれらの活動の確認と再組織のため、宮川寅雄がオルグとして来り、彼もここで検挙されている。

私は数年前、この間の京都の事情を調べにいつたが、中央では、当時の中央委員阿部義美氏がときどき中央にやつてくるので、彼でもつかまえて聞けば判るかも知れぬとのことだった。また宮川については、小生旧制高校の先輩で、彼と親しい人がいて、自分が紹介すれば、当時の事情を話すかも知れぬ。とのことだったが、両者ともそのままになり、今日に至っている。

ところが、昨年十一月「宮本頤治文芸評論選集、第一巻」が出版され、その「あとがき」に、たまたま、彼の人物評価が載っているので、是非「燎原」紙上に載せていただきたいと思います。

勿論、これは「燎原」の性格に制約されることなので、他の「研究誌紙・単行本」ならいざ知らず、まず、「燎原」の生い立ちをふりかえってみましょう。

「京都の民主運動史を語る会」は昨年二月誕生、一昨年京都の生んだ二大先覚者、山本宣治虐殺五〇周年、生誕九〇周年、河上肇生誕百年を記念して京都のこのすぐれた、進歩的、革新的、民主的伝統を生かし、可能な限り生き残った人々の口を通じ、或いは若くとも「眞実」の歴史を語れる学者によって、将来、巾と視野の広い革新統一戦線の一翼として、京都をして文字通り、

「日本の夜明けは京都から」の語り部の役割を使命として生れました。

ご存知のように、最近では戦前日本の歴史資料は米軍が押えて持ち帰ったので、戦前の歴史研究は、いまアメリカにいた方が手つとり早いとか、戦

し、小西氏は現在、香川県琴平町で党の町会議員の現職であり、数年前私は香川県党を通じ連絡したが、うまく連絡がつかず、一度機会をみて是非会って話を聞きたいと思つてゐる。

第三は——京都における多数派活動です。現在生存者で、竹中恒三郎、細川三四、吉見光風の諸氏が活動しておりますが、是非一度、これらの人の談話の場をつくりたいと思つてゐる。

前の司法・内務省、または、官許報道商業紙の記録が、相当たくさん出し廻っていますが、敵は何とかして、治安維持法の拡大解釈適用、味方は何とかしてその魔手から逃れようとしてつくられた調査や公判記録など、当然信用は受けません。そこでは「眞実」ではなく、せいぜい「事実」ぐらいが信じられるだけでしょう。

「研究誌紙・単行本」と「燎原」掲載記事のちがいは、「燎原」記事が何かもう、将来、京都の革新統一戦線に戦力として役立つものが望ましいわけだ

わが国についていえば、いま戦後第二次の反動攻勢の時期だといわれています。この時期は革新政党・労働戦線の一部に右傾化が目立つこと、安保条約の強化、自衛隊の拡充、アメリカの日本への核持込みの露骨化、ブルジョア天皇制の肥大化、対ソ脅威論のキヤーペーンが盛に行われ、天皇制と自衛隊の危険な接近が戦前を彷彿とさせます。昭和初期には革新勢力といつても極めて小人数であり、体を張って反戦平和を闘った唯一の革新勢力の中核日本社会民主党でさえ党員五百人といった状態で、若い私たちもその中の一人として非常痛苦を感じたものでした。

また二人の碩学教育者の義弟として、若いとき、良かれ悪しかれ活動家だった人で、生涯の後半は毛沢東主義者になり、日本共産党の打倒をことごとくいた。また、東京でも、大阪でも多いが自由意志で、革新政党、特に共産党に入党し、自由意志で自然離党したは問題外として、党規約の最高罰則である「除名」になり、その後も引き続き、反党的党破壊活動をこととしている人、著名な小説家として、党をテーマに手の込んだ党誹謗をつづけた人、若いときにには、反戦平和の活動家、またイデオロギーとして評価された人が、最近

最後に一言、歴史は充分、調査を重ねて正確なものでなければならぬ、といふことがいわれ、私もその通りだと思います。

「研究誌紙・単行本」で研究中、勿論、「眞実」が発見される場合もあるでしょう。

ただ、私は「燎原」の性格上、それらのちがいを私の個人的意見として述べたまでです。

私は、しかし、「眞実」と「事實」をはつきりさせ、「事實」は「眞実」の当然基礎にはなるが「眞実」は通俗的に表現すれば、「事實」データを最大、最小漏らさず蒐集し、慎重にそれ

第二次大戦後、ソ連邦に学び、廿個近くの社会主义国がこの地球上に誕生しました。これらの国々は社会発展法則にしたがい「科学的社会主义」理論を用いたが、一国の例外もなく指針としておりまます。いずれの国もまた、巨視的には社会主义成生期にあるので未熟な点は止むをえません。

「師」——といった表現がある。
「対敵矛盾」と私なりに評価した場合、その人はゲスト失格である。例えば、京都でも、随分若い頃からあらゆる分野で、活動家だった人がいる。しかし、この人は現時点では「部落民以外はすべて差別者」とし、「部落排除主義」を基調としている。

デマをとばされ、また、会合場所の繪入地図まで添えるに至った宮川を、名指しで非難するのは当然のことと思う。敵えのあまりに念の入った屈服も、勿論私のゲストの対象にはならない。しかし、宮川も一人の「反面教師」にはなるう。

しかし、今はちがう、日本全国にせ
新エネルギーは満ちており、革新三日
標を中心に、結集すれば、革新統一の
線も不可能ではない。
すなわち(一)安保反対、中立厳守(二)
資本の立場を排し、国民本位の政治を
(三)軍国主義復活反対、議会の民主的運
営、民主主義の確立――この三目標を
ある。

では自衛隊増強の第一線で活躍している。革新政党についていえば、東京、大阪には、党創立、党再建について随分貢献した人がいます。また、大学教授のイデオロギーもいます。

しかし、私は以上の人たちを「対敵矛盾」として処理し、「反面教師」として教訓を引出すことにしている。

【研究対象】としてなら、この人た

を分析総合して初めて全体像「真実」が発見されることを一言いっておきたかったのです。

(府立医大病院病厅にて 5/27 記)

旧縁乃会会報

▽貴贈図書・資料紹介△
復刊第七号 一九八一、五發行

一

一、モップル国際赤色救援会—その終焉について— 滝沢 一郎

一、事務所ニュースの頃 山本喜三郎

一、救援運動と私 小沢三千雄

一、永島暢子さんのこと（鈴木裕子）

一、多喜二の恋人 （山内忠吉）

一、回想の一こま （宮岡融）外

発行所 東京都三鷹市上連雀六一九

七一二 侯野旭方 旧縁の会

第二次大戦後、ソ連邦に学び、廿個近くの社会主义国がこの地球上に誕生しました。これらの国々は社会発展法則にしたがい「科学的社会主义」理論を用いたが、一国の例外もなく指針としておりまます。いずれの国もまた、巨視的には社会主义成生期にあるので未熟な点は止むをえません。

「師」——といった表現がある。
「対敵矛盾」と私なりに評価した場合、その人はゲスト失格である。例えば、京都でも、随分若い頃からあらゆる分野で、活動家だった人がいる。しかし、この人は現時点では「部落民以外はすべて差別者」とし、「部落排除主義」を基調としている。

○ では、いりやうの部員たる宮川は、勿論私のゲストの対象にはならない。しかし、宮川も一人の「反面教師」にはなるう。

しかし、今はちがう、日本全国にせ
新エネルギーは満ちており、革新三日
標を中心に、結集すれば、革新統一の
線も不可能ではない。
すなわち(一)安保反対、中立厳守(二)
資本の立場を排し、国民本位の政治を
(三)軍国主義復活反対、議会の民主的運
営、民主主義の確立――この三目標を
ある。

では自衛隊増強の第一線で活躍している。革新政党についていえば、東京、大阪には、党創立、党再建について随分貢献した人がいます。また、大学教授のイデオロギーもいます。

しかし、私は以上の人たちを「対敵矛盾」として処理し、「反面教師」として教訓を引出すことにしている。

【研究対象】としてなら、この人た

を分析総合して初めて全体像「真実」が発見されることを一言いっておきたかったのです。

(府立医大病院病厅にて 5/27 記)

最後に一言、歴史は充分、調査を重ねて正確なものでなければならぬ、といふことがいわれ、私もその通りだと思います。

「研究誌紙・単行本」で研究中、勿論、「眞実」が発見される場合もあるでしょう。

ただ、私は「燎原」の性格上、それらのちがいを私の個人的意見として述べたまでです。

私は、しかし、「眞実」と「事実」をはつきりさせ、「事実」は「眞実」の当然基礎にはなるが「眞実」は通俗的に表現すれば、「事実」データを最大、最小漏らさず蒐集し、慎重にそれ

「土曜日」以後
(五)

齋藤雷太郎

「土曜日」以後 (五)

道具一つないガランとした店内が、白い厚紙を張つて画鋲で止められ、みかんやりんごを箱ごとならべた。にわか果実店が昭和十四年十二月二十八日に開店した。花輪一つない開店風景であるが、私は張り切っていた。

場所柄のお蔭もあって、どうにか生活が出来るようになつた。商売に馴れた頃、戦争は進行して、物資の不足が目立つようになつた。やつと仕入れたわづかな果物は、安い倅で売るので、すぐ売れ切れる。こんな商売にならないような時期のある日、近くの八百屋が、野菜類を山のようにならべて、○を無視した値札を付けて、どううと売出した。黒山のような人だからである。

経済関係のボリが来た。「野菜不足で市民の皆さんのが困つて居るので、をかけて野菜を集めて来た。高い原価に少しの利を上のせしているが、暴はむさぶつて居ない。消費者に奉仕して居るのだ」と悪るびれない態度である。品不足の現状を考えたか、そのボリは見て見ぬふりである。私は名もない庶民の一人である、百屋の勇氣あるこの行動におどろいた。

極度な品不足で、ヤミが横行するようになったが、彼等の間では、金を視した商品の取引はヤミでなく、国相場と云われている。お上の秩序でえなくなれば、自分達町人の秩序で

半世紀前の同志たち

東京 梅田 積

各地の仲間から

各地の仲間から
の山岸一章さんから、しばしば手紙を貰うようになつた。日本帝国主義の侵略戦争に対する、日本共産党の反対斗争の記録を、近い内に単行本として出したいので、協力をしてくれないか、というのである。彼は数年前、『文化評論』に「聳えるマスト」という反戦小説を載せたのだが、もっと克明に書き度いというのである。

私が、党の軍事部員として、地下活動中、検挙されたのは、昭和七年十月

きて行くのは、当然と考えているのである。
上役のムチとアメに馴らされて、サリードで生きて居る人々の想像のつかない、臨機応変に生きる、庶民の哲学がそこにあると思った。自分の不明とあまさを深く反省させられた一コマであつた。

大阪市内にある全部の果実商、八百屋の企業合同が実施され、青果物が配給制になる。私も配給所員となって働くことになった。

日米戦争が始った頃、天満の特高が来た。滝川幸辰や岡田正三の動きが大きいので、さぐつて見てくれと云うのである。

つたせいか、七十一才になるが未だ丈夫だ、という話で、現在は社会党に入党、飛鳥田派で仕事をしているとの事だ。寺尾一幹君は「おおかたそうだろう」のニンクネームに背かず、今でも元気で、紙業会社の社長さんで活躍している。尚、私が東京の渋谷署のブタ箱に入れられた時、京都駅前旅館の娘さんで「お花ちゃん」という、十八、九位のお嬢さんがいたがこれが、偉い豪傑で、既に、東京中のブタ箱を一年以上、タライ廻しになっていたのにも関わらず、入って来る仲間たちに「頑張れ頑張れ」と気合をかけているのに驚いたり、感心したりしたものである。このお嬢さんも今では、七十才前後のおばあちゃんになっている筈で、生きているなら逢いたいものだと思つている。一九八一、四、五

(東京都不当解雇復権同盟委員長)

